

ノーラ・オブライエン

Nora O'Brien

ハートフォード財団高齢者事業担当部長

ボブ・バトラー氏が7月4日に逝去されたことを知り、私は強い衝撃を受けた。老年学者になって約25年が経つが、バトラー氏が亡くなるかもしれない、あるいは亡くなるだろうということをまったく想像していなかった。80年代初めに“Why Survive? Being Old in America”を読んで以来、ボブは絶えず私の人生の中に存在し続けた。

老年精神医学を中心とするエイジング研究に関わることを決めていた私にとって、ボブはまさに「ロックスター」のようであった。私のヒーローであった。彼は、高齢者のためにより良い社会を創造することに自らの生涯とキャリアを捧げていたが、私も同じ道を歩もうと考えた。

1994年ブルックデイル財団に勤務し、個人的にボブと会う機会が巡ってきたとき、私は、感動するとともに緊張でドキドキした。ボブの自宅の書斎で会ったのだが、私は余りに緊張して話をする事ができないほどであった。彼は、このうえなく優しく、気取らず、親切であった。1998年まで彼が助言をしていたブルックデイル・フェローシップ・プログラムで彼と共同研究を行い、その後ILC米国で彼とともに働くことになった。

私はいつもボブの豊富な知識に感銘を覚えた。他の人には真似できない優れた物の見方や考え方を持っていた。例えば、「長寿と人口高齢化は経済にとって脅威であり社会の枯渇をもたらす」といった一般に広く支持される考えは信じず、むしろ「健康と長寿は富を生み出す」と確信していた。そこで彼は、この理論を検証す

るための研究を委託した。

健康は生涯を通して、結果的に生産的な雇用をもたらすと信じていた。そして彼自身がその良き見本であった。

ボブはいつも無限のエネルギーにあふれ、楽観的であった。日々たくさんの新たな考えを生み出していた。同時にたくさんのプロジェクトに取り組んでいたため、私には時折休息が必要であったが、ボブは、忙しくなればなるほど精力的に活動するように見えた。私たちは愛をこめて、「Energizer Bunny (エナジャイザー・バニー:エナジャイザー社のコマーシャルに登場するピンクのうさぎ)」と彼を呼んでいた。

ボブは真に“Renaissance Man”(「勇気あるもの」1994年、ペニー・マーシャル監督の映画のタイトル)であったが、偉ぶることなく親しみのある人であった。自分自身は精神医学者であったが、高齢者に適切なケアを提供するには学際的なチームが必要であると確信していた。多様な専門分野からスタッフを雇い、常にあらゆることに我々のインプットを求めた。ILC米国スタッフ全員が、ILC米国の全出版物に加えて彼の著書“The Longevity Revolution”の各章を読み、意見を述べた。

ボブは医療の専門家全員が老年医学研修のための支援を受けるべきであると考えた。医師を対象とする老年医学研究奨励賞の創設を求めて懸命に議会に働きかけた。ひとたび足掛かりができると、看護師やソーシャルワーカーに関



ILC 各国理事長と関係者。左から3人目がベレイラドミニカ共和国理事長、
そこから右へ筆者、森岡日本理事長、フォレットフランス理事長、バトラー博士、グリーンクロス英国理事長

しても同様の計画を立てた。私は今、ハートフォード財団で働いていることを名誉に思う。ここでは、同僚とともに、こうした学際的な高齢者医療のビジョンを追究し続けることができるからである。

この数週間、世界各地の多くの友人や仲間から連絡があった。多くのリーダーたちが、ボブに刺激され触発されたと私に語った。ボブに鼓舞されてILCを設立したと記した仲間も数人いる。良き友の一人は、皆の思いを簡潔に綴った。「私の悲しみは想像できないでしょう。ボブはとても大切な友人であっただけではなく、ひらめきや感動を私に与え続けてくれました。そのようなぐいませな方の傍にいられたことを何よりも誇りに思います。いつまでも彼のことを忘れないでしょう」

●

多くの仲間が、「誰がボブの後任になれるか?」「次世代の誰がボブの後継者になれるか?」と思いを巡らしている。私は、誰にもそれはできないし、そうすべきでないと思う。ボブの目標は時代を先取りしたリーダーになること、高齢者へのより良きケアの実現を心から信じ、その変革に着手するよう人々を鼓舞することであった。その道筋をつけるには一人のリーダーが必要だった。高齢者のためにより良い社会を築くには、全労働力が必要である。これがハートフォード財団の任務であり、また高齢問題に関わるあなた方の任務でもあると確信する。我々の共通の目標に向かって協力することによって、ボブに敬意を払おう。